



Newsletter

No. 30 June 30 2018

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

笑顔と挨拶で始まる1日

Newsletter30号の巻頭言を担当させていただきます、東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻（ジョイント・ディグリー・プログラム：JDP）1年生の松宮由利子です。

今年4月にサンチャゴへ到着して早3ヶ月が経ちました。

日本は梅雨明けが発表され益々暑くなる中、西日本豪雨・大阪府北部地震・千葉県沖地震と災害に見舞われ、甚大な被害が出ております事、心よりお見舞い申し上げます。

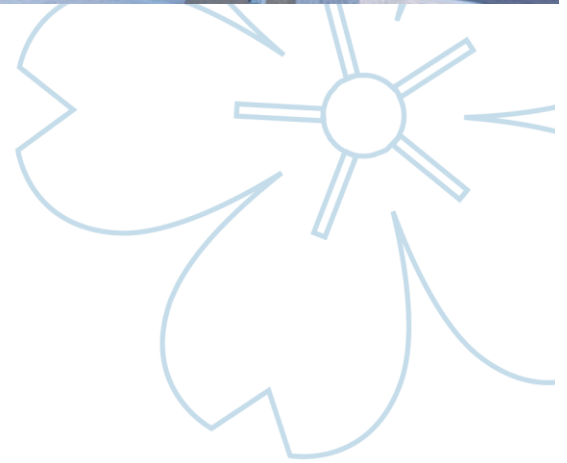
サンチャゴは寒気いよいよ厳しく、窓から見えるアンデスの山々はすっかり雪景色です。朝晩は非常に冷え込み、暖房とCalientacamásというベッドに敷くホットカーペットが必需品となっています。

スペイン語もままならない生活の中で感じる事は、チリ人は非常に紳士的で友好的だという事です。行き交う人々は、見知らぬ人同士でも“¡Hola!”と笑顔で挨拶を交わし、「お先にどうぞ」とドアを後ろから来る人の為に開けてくれます。地下鉄内では座席を座る人に暗黙の優先順位があるようで、老人・子供は勿論、女性にも席を譲ります（ゆえに、男性はほとんど座席には座れないという状態です）。私自身、日本の電車で席を譲ろうと席を立ったところ、中年男性が席を必要としている方に声をかける前に座ってしまい、やり場のない気持ちになった経験があります。世界的に見て礼儀正しいと言われる日本人ですが、他者との関わりを極力避け、電車内ではスマホに夢中になって譲る気のない日本人のモラルの低さには恥ずかしいとしか言いようがありません。

2020年の東京オリンピックに向けて益々グローバル化の進む日本ではありますが、世界基準におけるモラルについて見直す必要があると思います。

笑顔で挨拶を交わしたり、他者へ手助けをした事で「ありがとう」と言ってもらう事で、非常に満たされた気持ちでその日が迎えられるのではないのでしょうか。

松宮由利子 博士課程医歯学総合研究科 1年



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
JDPプログラム	2
PRENECの進捗状況	3
プロジェクトセメスター	4
活動報告	5

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年3月末にチリに到着したJDP二期生である松宮由利子医師は、現在、クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)での臨床研究演習及び、チリ大学における基礎科目を中心に取り組んでいます。これ以外にも、JDP学生として様々な活動に参加しておりますので、本号ではその様子をお伝えいたします。

JDP関係者懇親会

5月15日、チリ大学主催のJDP関係者懇親会がサンティアゴのシェラトンホテルにて行われました。オライアン教授、ウリベ教授、カスティジョン教授、ポニアチック教授、トレス准教授、チリ大学医学部国際交流課副課長のアウマダ氏、同大学院局評価室のアエド氏に加えて、JDP学生のサモラーノ医師、サナブリア医師、松宮医師が参加しました。

JDP学生の進捗等の報告や、JDPプログラムに関する意見交換が行われました。



懇親会の様子

チリ大学総合キャンパスにてプログラムの紹介



発表の様子

5月22日、チリ大学総合キャンパスで、大学院留学生を対象としたウェルカムセレモニーが行われました。

チリ大学は、主に中南米諸国から多くの学生を受け入れており、セレモニーには約120名の留学生が参加しました。同大学院には様々なプログラムが存在し、各プログラムの代表者が概要説明を行いました。

松宮医師はJDPの紹介を行うとともに、「世界トップクラスの研究施設であるチリ大学で学べる事を誇りに思うとともに、両国で学べる利点を生かして、国際的医療人として活躍できる人材となるべく勉学に励みたい」と抱負を語りました。

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。現在、ブタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市でプログラムが行われています。6都市に加えて、新たにコンセプションで、疫学的便潜血反応検査キットを用いた検査が開始されました。また、国外ではパラグアイで、PRENECの開始に向けての準備が順調に進行しています。今号ではその様子をお伝えします。

パラグアイにおけるシンポジウム



左よりロペス医師、吉田所長、カンポス医師、モリニゴ大臣、オルティス副所長

4月18日から20日の期間に、パラグアイのアスンシオンにあるパラグアイ国立がん研究所(INCAN)で、大腸腫瘍疾患シンポジウムが開催され、PRENEC責任者であるロペス医師、PRENECコーディネーターのボンセ看護師とともにLACRCの小田柿助教が演者として招聘されました。

会期中に開かれたセレモニーには、パラグアイ厚生省のモリニゴ大臣、当時のJICAパラグアイ事務所所長であった吉田所長、同研究所のオルティス副所長、パラグアイにおけるPRENEC責任者となるカンポ医師が出席しました。

本シンポジウムでは、小田柿助教が『PRENECにおける大腸内視鏡トレーニング』に関する発表を行いました。

また、並行して巨大結腸モデルを使用した一般市民への啓発活動も行われました。

こういった活動を通して、パラグアイ国内でのPRENECの拡大が期待されます。



関係者との記念撮影



巨大結腸モデル内にて記念撮影

プロジェクトセメスター

本学は、2010年から、学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)の目的で、医学科4年生を約4~6カ月に渡ってチリの研究施設に派遣してきました。

今年度も2名の学生がチリ大学の研究室に所属し、6月初旬より研究に取り組んでいます。日本とは異なる環境下での生活や研究は、困難も伴いますが、異文化を楽しみながら充実した時間が過ごせることを願って、LACRCはサポートを行ってまいります。

プロジェクトセメスター学生の抱負



サンクリストバルの丘で食べた
Mote con Huesillo

川上七海 チリ大学 感染症学研究室所属

医学科4年の川上七海です。5月末からチリでの生活が始まって3週間が経ち、最初は全く慣れなかったハグをしながらのこちらの挨拶にも徐々になじんできました。買い物の際にはまだ分からない単語が多く翻訳アプリと見比べながらスーパーを歩き回る毎日です。

私はチリ大学医学部小児感染症学のMiguel O’Ryan先生の研究室でノロウイルスの検出とジェノタイプングについて学んでいます。研究テーマはチリのある地域におけるノロウイルスのジェノタイプングになる予定で現在は様々な論文を読んでノロウイルスの基礎知識や各種検出、ジェノタイプング方法について整理している段階です。O’Ryan先生の研究室の方々はもちろん周りの研究室のメンバーや秘書課の方々も非常に明るく親切で、楽しくチリでの研究室生活を送ることができています。

本学、チリ大学の先生方、学生派遣係やLACRCの方々など、非常に多くの方々のサポートのもと実現しているこの留学を実り多いものにできるよう励んでいます。

隈 宙音 チリ大学 腎臓病学研究室所属

こんにちは。今年度チリ大学派遣学生の隈宙音と申します。時の流れは早いもので、ようやくこちらでの生活に慣れたかと思えばすでに1ヶ月が経ってしまいました。

私はチリ大学医学部腎臓病学のLuis Michea先生のもとで、腎不全に関与しているとされるホルモンの発現調節機構を調べています。研究に関する一切は英語(とスペイン語少々)で説明されるため、それらを素早く理解するのは決して容易ではありませんが、研究室のメンバーがいつも親切に助けてくださるおかげで楽しく過ごすことができています。「この実験は何の目的で行われ、どういう原理で成り立ち、どんな結果が予想されるのか」をきちんと理解するのを目標に日々奮闘しております。

一方でスペイン語の勉強も欠かさずに続けています。まだ始めてから間もないものの、帰る頃には立派なEspañol Chilenoを話せることを夢見て教科書を握りしめているところです。

LACRC、チリ大学の方々をはじめとして、医科歯科の先生・スタッフや歴代の先輩方には多大なサポートを頂いております。皆さまへの感謝を忘れずにこれからも全力で取り組んでまいります。



中央市場の様子です。歩いていると日本語でウニ！と言われます。

LACRC活動報告

チリ南部における胃がん検診プロジェクト

昨年に続き、チリ内視鏡学会主催の胃がん検診プロジェクトが行われました。今回は、4月16日から約8週間にわたりチリ南部の3都市（コンセプション、ビクトリア、ヌエバ・インペリアル）で行われ、小田柿助教は5月21日から24日の期間に、内視鏡技術指導者として、ビクトリアの公立病院に招聘されました。このプロジェクトは、臨床研究的な要素の他に、チリ地方都市での病院の設備や内視鏡医の不足などの問題から内視鏡検査が数年待ちの状況を改善する目的もあり、40歳以上の最低でも1年以上の待機患者を対象に実施されました。

小田柿助教に加え、日本から九州大学の森山智彦医師、神戸大学の石田司医師、大阪国際がんセンターの金坂卓医師が招聘されました。森山医師は中南米諸国の医師らと定期的にテレビカンファレンスをされるなど中南米事情に精通され、また、石田医師はフィリピンに、金坂医師はスウェーデンに、現地医師への内視鏡指導の目的で赴任された経験のある方々です。

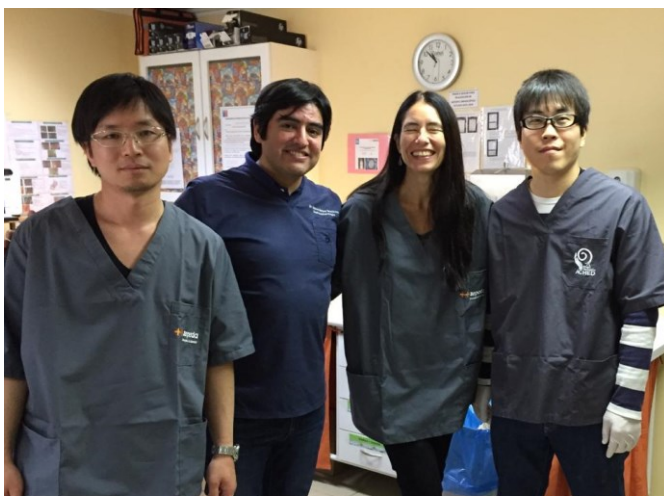
こういった先生方と意見交換をしたり、実際に指導する現場を目にできたことは、チリでの活動を行っていく上で、非常に有意義な機会となりました。今後も様々な活動を通して、チリ及び中南米諸国の医療に貢献できればと思っています。



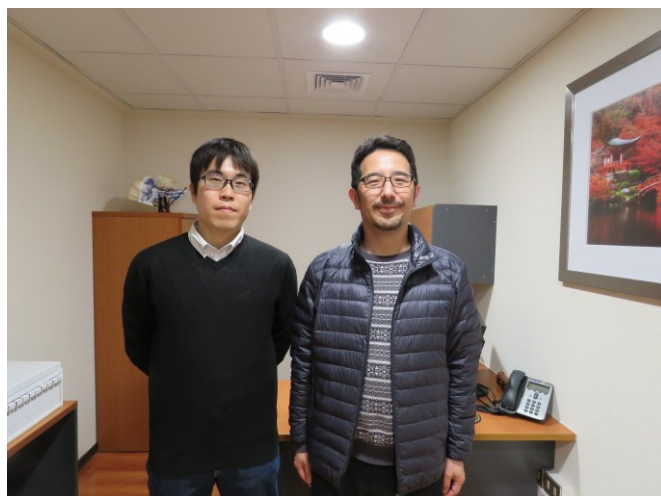
病院スタッフとの記念撮影



石田医師(左)と病院スタッフ



左より金坂医師、モリーナ医師、ピアル医師、小田柿助教



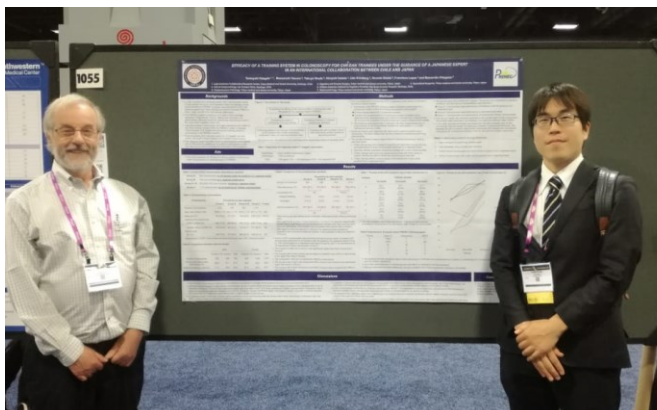
森山医師がLACRCを訪れた際の記念撮影

米国消化器病週間における発表

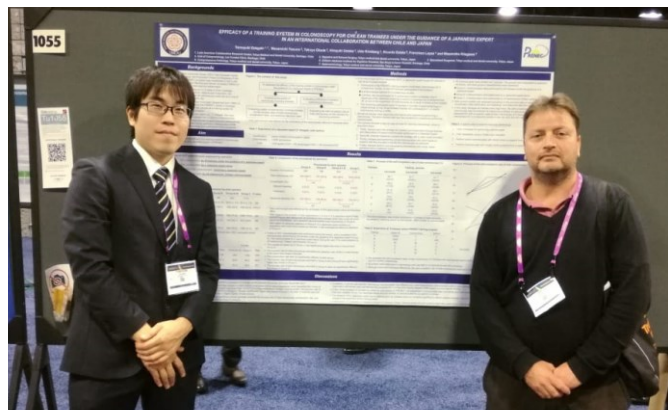
6月2日から5日にかけてアメリカ、ワシントンD.C.で開催された米国消化器病週間(Digestive Disease Week 2018)にて、小田柿助教がポスター発表を行いました。

“EFFICACY OF A TRAINING SYSTEM IN COLONOSCOPY FOR CHILEAN TRAINEES UNDER THE GUIDANCE OF A JAPANESE EXPERT IN AN INTERNATIONAL COLLABORATION BETWEEN CHILE AND JAPAN”という演目でPRENECにおける研修医師への大腸内視鏡トレーニング方法及び結果についてまとめました。

発表の際に、国際医療協力を興味のある先生方と意見交換をした他、プンタ・アレナスおよびコキンボのPRENEC拠点長であるカロピッチ先生、ブレスキー先生がPRENEC関係者として訪れてくれました。今後もLACRCの活動を学会や論文等で発表していきたいと考えています。



会場にポスター発表を聞きに訪れたカロピッチ医師(左)と記念撮影



会場にポスター発表を聞きに訪れたブレスキー医師(右)と記念撮影



DDW2018のロゴ



ワシントン・モニュメント

編集後記

当地では、移民の増加が著しく、昨年は78万人、遂に今年は100万人となり社会問題となっております。ここ数年は政治的な背景もあり、ハイチ人、ベネズエラ人が移民の大半となっておりますが、この影響を受け、外国人登録の手続きをする国際警察署には、連日、外国人の長蛇の列ができています。チリに到着して間もない学生さんも、この列に並ぶこととなりましたが、今月、無事にチリでの身分証明書が交付され安堵しているところです。

今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点 Latin American Collaborative Research Center Newsletter No.30, June 2018

[発行日] 2018年6月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp